

国際親善大使として

日差しもだんだんと暖くなり、すっかり春らしくなってきましたね。

新しい学年への進級や進学など、様々な環境の変化があるのもこの時期です。

皆さんはいかがお過ごしですか？体調は崩していませんか？

今回の R2 のテーマは”国際親善大使として”です。皆さんもこれから数ヶ月後には国際親善大使として旅立つことになる訳ですが、一体親善大使って何をやるの??と疑問を持った方も多いと思います。まだまだ漠然とした留学を、少しでも具体的なイメージに繋げるためにも、ぜひ参考にいただければ嬉しく思います。

また、今回は番外編もありますのでそちらもお楽しみください。

執筆者の皆さんに感謝しつつ、今月号も R2 を楽しんでくださいね！

うだがわ かおり
宇多川 薫 【2002 年度 アメリカ派遣】



ホストクラブでの活動

留学中 Rotary の活動で印象に残っているのはホストクラブの活動です。ホストクラブの例会は平日の昼間だったので、月に1回位しか出ていませんでしたが、毎回行く度に温かく迎えられ1人で留学しているんじゃないんだなということを感じさせられました。ある日、パンケーキ会があるから来てね、とホスト父と一緒に教会へ行きました。パンケーキ会とは、地域の人達を呼び、楽しくブランチを取ろうと地域に開かれた朝食会でした。が、一方でホームレスや貧しい家庭に食事を提供するという意味も込められていたのです。私は正直食べているばかりでしたが、学校では会えない様々な人達と出会い、話す機会をもらいました。留学生というだけで、人が寄って来るのは(困る時もあるけれど)良い意味で特権だと思います。これ以外にも老人ホームでの食事会を手伝ったり、ホストクラブを通じて地域を身近に感じるようになりました。派遣前、学校行事で地域交流ってあったけど、自分が地域で支えられてるなんて考えてなかったと思います。こういうことは、普段の生活の中からは、なかなか気付くことができなかったけど、改めて Rotary の学生として見たからこそ発見できたんだと思います。派遣先でいろんなことに参加して欲しいと思います、離れてみたからこそ気付ける発見がたくさんあると思います。その発見こそが国際親善大使として、派遣先であなたを変える何かかもしれない。

ロータリーの留学生として

YEPとして（全世界との交流）

ロータリーの留学というのは世界各国、各地区から様々な留学生が派遣されます。もしかしたら、同じ派遣先に私たちと同じように派遣されている学生がいるかもしれません。このような状況のもと私たちは日本と相手国だけを対象とした留学ではなく、派遣先を一つのきっかけとして、様々な国を知ってもらいたいです。一つの例ですが、私の経験では、ロータリーを通して在露韓国人とのレセプションに参加したことがあります。韓国の方は日本人のことを嫌っているというイメージがあったのですが、実際にはとても暖かく受け入れていただきました。全員がこの様な機会にめぐまれるとは限りませんが、向こうで出会った違う国からの派遣学生や隣国の方と接して、いろいろな事を吸収してきてもらいたいです。

YEPとして（ロータリーを知る）

ロータリーで留学すると必ずスポンサークラブとホストクラブの二つのクラブと接する機会があります。そして、帰国後にはスポンサークラブでの講話を行います。このような機会を是非有効活用してもらいたいです。ロータリーを通じて留学するということは、二つのロータリークラブの架け橋的存在になるわけなので、両方のクラブを知っておく必要があります。私はできなかったのですが、両クラブがどのような奉仕活動をしているのか、またどのような違いがあるのか、それを両ロータリークラブに伝えるというのも一つの使命なのではないでしょうか。

日常生活の中で…

私が1年間の親善大使としての活動の中で、一番記憶に残っているのは、ホストファミリーと一緒によく料理をしたことです。2軒目のホストファミリーへ移ってからのことでしたが、以前その町に来ていた日本人留学生が置いていった一冊の日本料理の本がきっかけでした。カナダでは日本料理が注目され始めていましたが、周りは食事に対してとても保守的な人が多く、作っても受け入れてもらえないのではないかと心配していました。しかし、幸運にも私のホストファミリーは日本の食事に対してとても興味を持ってくれていて、その料理の本を参考に作ってみることにしました。もちろん材料は町のスーパーで買えるものだけ。巻き寿司を作ったのですが、見た目はともかく味は…という出来でした。ところが、現地で手に入るものだけを使ったからか、意外にもカナダ人の口に合う？味に仕上がったようで、とても喜んで食べてくれました。料理の仕方や、小皿にしょうゆを取り、そして箸を使って食べることを見せたのも、何かのショーを見るような感覚で楽しんでくれたようでした。

これがきっかけで、ホームステイで料理を頻繁にするようになったのですが、料理を楽しんでもらえた事で、ただ生活していく中でカナダ人と同化するだけでは得られない安心感を得ました。これは私の日本人としてのアイデンティティーを受け入れてもらえた事を感じることが出来たからだと思います。私の親善大使としての活動は何か特別な場所や機会を与えられて行うものではなく、常に日常の中にその舞台があったと思います。皆さんもぜひ自分にあった方法で、自分らしい活躍の方法を探してみてください！

素晴らしい経験のために

私は初めてのフランス派遣でした。そして派遣地でも初の日本人でした。

人間は、第一印象が永遠にその人に対する印象に影響するといいますが、私は旅立ちのとき着て行ったTシャツで出迎えてくださった人たちに大変由々しき第一印象を与えてしまったと思います。最初の派遣学生というのも、もしかするとその国の人々に対する第1印象に近いものがあるかもしれませんね。ですから皆さんには、派遣地で人々に与える第1印象というものを大切にしたいと思います。そして、青少年交換学生が国際親善大使としてみられるはとても光栄なことでしょう。私たちはロータリアン・交換学生・親善奨学生・現地の人々などと交流することを求められます。お金を払って自由に学びに行くのではなく、国際親善大使として行くということは、それ相応の決まり事や心がけなければいけないことはありますが、それを重圧に感じてほしくないと思います。4Dルールを例に挙げます。特に飲酒・喫煙は派遣先で友だちから勧められることがあるかもしれません。青少年交換学生として守らねばならないこの4Dルールですが、皆さんは飲酒・喫煙などは日本でも禁じられています。外国へ行けば通常はできることですが、そういった事は考えず、ただ日本にいるときの様にいつも通りいけばいいのです。皆さんはロータリアンに選ばれて留学する学生です。派遣地のロータリアンもそれを知っているはずですが、そのことを意識し過ぎずに、いつも通りのあなたでいてください。たとえ友だちに勧められても、「自分は自分」「やらないものはやらない」という意思を大切にしたいと思います。そうすれば、課せられた義務を重圧に感じることはないかと思えます。自分を貫き通すことは、あなたを人間として大きくします。そして皆さんには多くの出会いが待っています。青少年交換学生としての役目は、世界中にたくさんの仲間をつくることです。やってはいけないことも勿論ありますが、このやらなくてはならない素晴らしいことを思いっきりやってください。それが皆さんの留学の成功のために最も重要なことです。

アキバ系カルチャー！？

ロータリー交換留学生には、世界を知る、そして派遣先の人々に日本を知ってもらう、という大切な役割があります。僕も日本の文化を伝えるために、出発前に色々な準備をしました。ブラジルでは国際フェスタという、各国の留学生が出身国ごとにチームを作り自分の国を一般の方々に紹介するというイベントがあったので、そこでは着物や折り紙、踊りや料理など出発前に準備した日本らしい物を紹介しました。しかし、実はブラジルの若者の間では、すでにいくつかの日本の文化がすでに根付いていたのです。それは、アニメやゲームです。実はむこうの若い世代の間では、ありがちな日本の文化よりも、日本でのところの「アキバ系(?)カルチャー」のほうがより広く浸透していたのです。僕はそれらに対してこだわりはありませんでしたが、むこうではその事について強い関心を持たれました。また、それらは僕にとってとても大切なコミュニケーションの手段でもありました。例えば、僕がむこうの学校で作った最初の友達は、強烈な日本のアニメオタクの方でした。彼とは日本のアニメを通じて友達になったのですが、僕なんかよりもよっぽど詳しいので話についていくのがやっとでした。また「日本人＝ゲームが強い」と思われているのか、どの友達の家に遊びに行っても必ずといっていいほど、ゲームの勝負を挑まれました。2番目のホストファミリーの家にもPS2があり、ホストブラザーとはウイイレ(サッカーゲーム)で毎晩のように熱戦を繰り広げていました。このように、日本の文化といってもいわゆる伝統的なものだけではなく、最近の日本の文化を紹介する事は、今

の日本を知ってもらうためにも大切な事だと思います。そして、それらを通じてコミュニケーションを取るのも1つの手段ではないでしょうか。

ROTEXのここだけの話

～ローテックスとセンソウと、時々、ニホン～

こばやし ゆうき
小林 侑樹 【2005年度 ロシア派遣】



僕が派遣されていたロシア・サハリンは戦前、樺太と呼ばれ大日本軍が統治していました。しかし終戦を迎えるとソ連、やがてはロシアの領土となりました。あまり知られていないことですが、サハリンには日本時代に朝鮮半島から連れてこられた残留朝鮮人が4万人も未だに生活しています。そして、その中に混じり残留日本人も未だに生存しています。僕はそんなことは何も知らずに現地へ行き、その現実を目の当たりにしてとてつもない衝撃に襲われました。そして、その事が日本の教科書に載っていない現実、に悲しみと怒りを覚え、日本のあり方について再認識させられました。ロータリーの青少年交換留学は国と国との親善大使を目的にしています。ですが、現地で学ぶ事には「戦争」という私達が犯した罪もあったということをも身をもって体験しました。そして、「戦争」から何も幸せは生まれえないという事実をロシア留学中に改めて学び、帰国後は以前よりもお年寄りの話を聞くようにして、この戦争の体験を風化させないように、僕たちや次の世代にも受け継いでいこうと思うようになりました。

にしやま いっこう
西山 一行 【2002年度 アメリカ派遣】

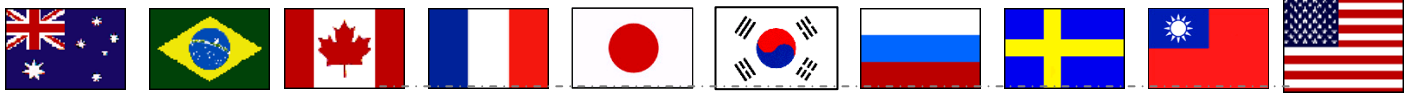


「私の叔父は日本軍に殺された。」
留学を始めて半年ほど経った頃、突然ホストファザーが口にした言葉です。一年間世話になり、本当の家族のように深い信頼を寄せていたホストファミリー。神様がいるのだとしたらこんな人達なんだろうな、と思わせるほど温かい人達でした。それなのにこんなことを、しかも夕食後の団欒の席で、いきなり言われたのです。「実は日本が嫌いな人だったのか……そうだとするならば、今までの優しさはうそだったのか…」このようなネガティブな思いと、「第二次世界大戦」という重い言葉がズシッと私にのしかかりました。そして、明らかに戸惑っている私をよそにホストファザーがその思いを語り始めました。「実は、第二次大戦中に叔父がハワイで殺されている。母は当時とても落ち込んだし、日本という国を決して良く思っていなかった。でも、母も私も現在の日本を良く知りもしないまま嫌いになるのではなく、君を受け入れることで暗い過去を払拭したかったんだ。」聞くと、私が英語を不自由になく扱えるようになる頃合を見計らって言おうと思っていたとのこと。アメリカに滞在し

て以来、毎日楽しく生活を共にしていたホストファミリーの家族の死に、日本が関係していたという事がただただショックでした。

何度頭で考え直しても、どう解釈しても、変えられない事実。土下座でもして謝りたい気持ちでしたが、「君は親善大使として本当によくやっている。日本に対するイメージは良くなるばかりで、本当に君を受け入れてよかった。」というホストファザーの言葉に救われました。アメリカに来て、この家に滞在できて、本当に良かったと思った瞬間でした。この日初めて私は、日本は被爆国であるけれども日本の手によっても多くの犠牲者を出していたという過去に、「日本人として」初めて本気で向き合いました。戦争はただの歴史の一部ではなく、その余波はまだまだ現在にも続いている。そして青少年交換プログラムを通して小さい親善大使としてアメリカに派遣されたことの責任の重さを感じ、その後の留学生活を通して一人でも多くの人に日本を紹介し両国の架け橋になりたいという強い思いがこみ上げてきました。

戦争について留学前にきちんと勉強をしておいた方が良い、といろいろな人に言われると思います。それには、きちんと理由があります。皆さんはまだ日本で暮らしている限り、戦争と自分自身のリンクを意識する機会は少ないですが、一步日本を出るとあなたは皆から「日本人」として見られます。そして、出会う人の中には日本と戦争を連想する人がいたり、日本人がどう戦争を捉えているかということを探られる機会があるということが実際にあります。ですから、少しでも関係する事柄を派遣前に知っておくということは、言うまでもなく大切になってきます。全てを知る必要はありませんが、せめて基本的な流れと派遣国に関わる事柄については自分なりの意見を持つようにするといいいと思います。



R²は当 2780 地区多くのローテックスの方々、
ガバナー事務所の協力を基に発行されています。
多大なる尽力に感謝いたします。

R² 編集長： 宇多川薫 (2002 年度アメリカ合衆国)